

## 多義語「顔」に関する一考察

著者	林 筱
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	18
ページ	74-82
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1475/00002329/">http://id.nii.ac.jp/1475/00002329/</a>

# 多義語「顔」に関する一考察

林 箬\*

## 要 旨

本論文は身体部位詞の多義語「顔」を研究対象とする。多義語「顔」の基本義と拡張義が文脈においてどのような使用特徴があるのかを明らかにするため、コーパスを使い、計量言語学の視点から量的な考察を行った。また、対訳小説から「顔」が使用されている文を抽出し、「顔」が中国語においてどのように扱われているのかについても考察を行った。「顔」は基本義から様々な意味に拡張したが、最も多く使われている意味は基本義であること、文脈において各意味の「顔」と共起しやすい要素が違うこと、日本語の多義語「顔」に完全に対応できる中国語がなく、表現し得る領域に明らかな差があることが今回の調査で証明された。

〔キーワード〕 身体部位詞 多義語 顔 コーパス

## 1. はじめに

日本語の中には多くの多義語が存在している。その中で身体部位詞が特に数が多い。「目」、「口」、「手」などの身体部位詞を対象とする研究は、日本語を対象とするものに限らずこれまでに多くなされてきた。「顔」という身体部位詞もその1つで、有菌（2008）は、「顔は人間にとって主要な感覚器官が集まる場所であり、またそれらの感覚器官の全体的配置（〈容貌〉）や感情（の変化）を表す〈表情〉は、他者を認識する際に重要なポイントになる。」と述べている。この点から、人間にとって「顔」という部位は身体において重要な地位を占めていると言える。「顔」は、ほかの身体部位詞と同様、身体部位としての概念だけでなく、その概念から派生した種々の概念を表すことができる。しかし、筆者の知る限りではほかの身体部位詞と比べて「顔」に関する研究は少ない。そこで、本稿では多義語「顔」に着目し、コーパスを使い、「顔」という語の基本義と派生義はどのような条件に基づいて実現したのかをそれぞれの例により、明らかにしていく。また、日中対訳の小説にある例文を考察することにより、日本語の多義語「顔」は中国語でどのように表されているかを明らかにし、中国語を母語とする学習者に対する「顔」に関する指導の一助としたい。

## 2. 先行研究

### 2.1 多義語「顔」の意味拡張について

田中・ケキゼ（2005）では、日本語とロシア語における「顔」が表す種々の概念について対照研究を行い、その用法の重なっている部分とずれている部分を考察し、それぞれと結びついている概念の違いを分析した。つまりこの論文では、両言語における多義語「顔」が表す種々の概念の共通点と相違点に対し、社会的・文化的観点からの動機付けが提示されていることになる。

有菌（2008）では、「顔」を構成要素に持つ慣用表現を研究対象とし、身体部位としての「顔」を「構造」「機能」「位置」と「形状」の観点から特徴付けている。また、メタファーとメトミニーで、「顔」という語の概念間の関係について明らかにした。

---

\*：中国廈門大学嘉庚学院日本語科

呉広(2009)は、「顔」に関する慣用表現を対象に、生理特徴、運動特徴、社会特徴という三つの側面に基づき、メタファーとメトミニニーによって各表現の意味拡張を分析し、「顔」の多義的意味と関連のある表現の成立過程について考察した。

上述のように、多義語「顔」に関する研究は多くないようである。しかも、大多数の先行研究は「顔」の慣用表現を対象に、認知言語学の視点から「顔」の意味拡張について考察しているに過ぎない。多義語「顔」の各語義の使用特徴及び中国語における対応表現について言及した研究はない。

## 2.2 多義語「顔」の意味について

### 2.2.1 『新明解国語辞典』(第7版)

『新明解国語辞典』(第7版)によると、「顔」は以下のような意味があると書かれている。

- (1) 頭のうちで、目・口・鼻などの存在する方の側。ヒト・サルでは毛が生えそろっていない。個体ごとに異なる特徴を持つが、血族・地域を単位にすれば、ある共通性の抽出が可能。(顔かたち、顔つき、様子、表情、態度など)
- (2) 顔に象徴されるその人自身(人格)。(人数、面目、名誉など)
- (3) その地域や社会でよく知られた名前(名声)。

### 2.2.2 『明鏡国語辞典』(携帯版)

『明鏡国語辞典』(携帯版)における「顔」の解釈は以下である。

- (1) 頭部の前面。目、鼻、口などがある部分。
- (2) 顔かたち。顔立ち。容貌。
- (3) 顔つき。表情。
- (4) 体面。面目。名誉。
- (5) 態度。
- (6) 知名度。また、勢力。影響。
- (7) ある組織・集団などの代表や典型となるもの。また、表にあらわれて目立つ部分。

### 2.2.3 『学研国語大辞典』(第2版)

『学研国語大辞典』(第2版)は多義語「顔」について、以下のように書いてある。

- (1) 人・動物の頭部のうち、目・鼻・口のある前面の部分。
- (2) [美醜の対象としてみた] 顔の様子。顔かたち。顔だち。容貌。
- (3) [心持ちのあらわれた] 顔の様子。顔つき。表情。
- (4) 人格を代表するものとしての顔。面目。体面。
- (5) ある物の、表にあらわれて目立つ部分。

## 2.3 本稿における多義語「顔」の捉え方

本稿では、上述の各辞書及び先行研究に載っている意味項目を参考に、多義語「顔」の意味を表1のように分類してみる。

表1 「顔」の意味

基本義	①	頭部の前面。目、鼻、口などがある部分。
具体的なものを指す拡張義	②	(美醜の対象としてみた) 顔の様子。顔かたち。顔だち。容貌。
	③	(気持ちのあらわれた) 顔の様子。顔つき。表情。
	④	交際、対面、関係、人脈
抽象的なものを指す拡張義	⑤	顔に象徴されるその人自身(人格)。(人数、面目、名誉、個性など)
	⑥	代表、知名度、影響力(よく知られた名前)

表1の意味分類に基づき、本稿ではまずコーパス調査を用い、多義語「顔」の各意味の使用状況と使用条件を明らかにする。その上で、小説（日本語・中国語）及び翻訳版にある「顔」の例文を考察し、多義語「顔」の中国語における扱い方を明らかにする。

### 3. コーパス調査

本研究は、多義語「顔」の使用状況と具体的な文における使用条件を究明するため、「顔」を形態素とする複合語や「顔」に関する慣用句を全部調査の対象とし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』<sup>1)</sup>を使い、ランダムで500文の例文を抽出し、考察を行った。

#### 3.1 コーパスに見られる「顔」の各意味の使用割合

多義語「顔」の各意味の具体的な使用状況を確認するため、まず500文の例文における「顔」の意味ごとの使用割合に関する調査を行った。調査結果を表2に示す。

表2 使用割合

各意味	①	②	③	④	⑤	⑥
出現数	224	48	139	23	64	2
割合%	44.8%	9.8%	27.6%	4.4%	12.8%	0.4%

表2から、今回の調査において、「顔」の最も多く使われている意味は意味①の基本義であり、その出現数は全例文の半分近くを占めていることが分かった。使用割合の上位二位と三位は「顔」の基本義と比較的意味が近い意味③と意味⑤であることも分かった。最も使用数が少ないのは、「顔」の基本義とかなり意味が離れている意味⑥であることも明らかになった。また、各意味の出現数を数え、意味①と意味③の割合は全例文の70%を超えていることも分かった。このことから、学習者に多義語の指導をする際に、派生義より基本義に重点を置くべきであると思われる。

多義語「顔」の上述の各意味は、どのような使用条件に基づいて実現したのか、またどのような特徴があるのかについては、次項3.2で分析する。

#### 3.2 多義語「顔」の各意味と共起しやすい要素

多義語「顔」の各意味が各例文において、どのような要素と共起しやすいのかを明らかにするため、本研究は『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』から抽出した500文の例文を対象に、意味ごとに量的な分析を行った。

##### 3.2.1 多義語「顔」の基本義について

基本義①の意味として使われた「顔」の例文が最も多く、この意味の「顔」と共起しやすい要素を表3に示す。

表3 共起しやすい要素

前接文脈		後接文脈	
要素	数値	要素	数値
の	83	を	93
なし <sup>2)</sup>	46	に	29
が	15	の	25
は	10	は	22
に	9	が	15

表3に示されているように、基本義①で使われている「顔」の直前と直後には、独立語より付属語の格助詞のほうが出現しやすい。今回の調査で「顔」の前に最も多く使われた要素は格助詞「の」であり、「顔」の後ろに最も多く使われた要素は格助詞「を」であることが分かる。また、「の」の前の成分は、ほぼ例文(1)と例文(2)のような人名や人称代名詞であり、「を」の後ろに出てきた最も多い動詞は例文(3)の「上げる」と例文(4)の「洗う」であることも明らかになった。それから、「顔」の前に何の表現もないもの、つまり、「顔」が文や節の冒頭部に現れるものが上位二位であった。このことから、「顔」が意味①として使われる場合、前にある修飾語と共起しにくく、後ろに「顔」に関わる動作を表す動詞と共起しやすい特徴があると言える。「顔写真」、「顔全体」、「顔中」のような複合語も今回の例文に出てきたが、数が僅かなので、表3には入れなかった。

- (1) 震える老人の手が、新汰の顔に押し当てられる<sup>3)</sup>。
- (2) 光沢のある褐色の髪に、彼女の顔は半分隠れていた。
- (3) 「どうしたの？」ケイトが顔を上げた。
- (4) ルーカスは顔を洗い、髪をタオルで拭き、Tシャツとジーンズに着替えた。

### 3.2.2 多義語「顔」の具体的なものを指す拡張意について

本稿では、意味②と意味③を「顔」の具体的なものを指す拡張意に分類した。意味②の「顔」と共起しやすい要素を表4に、意味③の「顔」と共起しやすい要素を表5に示す。

表4 共起しやすい要素

前接文脈		後接文脈	
要素	数値	要素	数値
なし	14	が	9
形容詞 <sup>4)</sup>	12	を	7
の	7	は	4

意味②の「顔」の例文数が100未満であったため、上位3位を表4に示した。表4から、意味②で使われる「顔」は文か節の冒頭に出現しやすいことと前に形容詞と共起しやすいことが分かる。文や節の冒頭に意味②の「顔」が出現しやすいところは意味①の「顔」と同様である。意味②の場合は例文(5)のように、後節文脈に「きれい」「可愛い」のような容貌を評価する形容詞や「～ようだ」「～らしい」のような比喩表現が見られる。また、意味②の「顔」の直前に出現した形容詞も、すべて例文(6)の「地味」のような容貌を描写する系の形容詞である。意味②の「顔」の後接文脈に出現頻度が高いのは格助詞「が」「を」と「は」の3つである。「が」と「は」は、例文(7)のように「顔」が文か節の冒頭部に使われた時に出現しやすい。「を」は、7文の例文中、4つの例文は例(8)のような「～顔をする」という「顔」の慣用語を用いた例文である。つまり、「顔」が②の意味として使われる時、「顔」の前か後ろに修飾表現が付いている。この修飾表現はほとんど「きれい」、「美しい」、「整った」などのような美醜関係の形容詞、第4種類動詞<sup>5)</sup>である。

- (5) 顔はかわいいというより、きれいといった感じです。
- (6) 地味な顔の人のほうがお化粧しだいで印象が変わるので、研究できますね。
- (7) 自分は韓国と日本のハーフですが、顔は日本人そのもので韓国人とはちっとも思われてません。
- (8) ケシの花のような顔をしたふとった男が、遊園地から通じている低い門を通った。

表5に示されているように、意味③の「顔」の前に、格助詞より形容詞と「そうだ」、「ようだ」のような様態表現の出現頻度が高いことが分かった。様態表現は意味①と意味②の「顔」と共起しやすい要素の上位に入っていないが、意味③で使われた「顔」の前接文脈に数多く出現した。この点については、日本語教育現場で多義語「顔」の意味③の用法を指導する際、例(9)のような様態表現と

表5 共起しやすい要素

前接文脈		後接文脈	
要素	数値	要素	数値
形容詞	29	を	64
様態表現	26	で	34
の	16	が	19
なし	11	は	9
第4種動詞	8	なし	7

共起する例文を提示するべきだと考える。また、例(10)のように、意味③の「顔」の前に現れた形容詞は「明るい」、「恐ろしい」、「まじめ」のような、人の表情や気持ちを表現する詞である。もう一つ興味深い点は、前接要素の第5位である第4種類動詞と表の中に入っていない第6位の副詞は例文(11)と例文(12)のように、すべて過去形「た」の形で出てきているというところである。

加えて、意味③の「顔」の直後に、格助詞「を」の使用数が最も多いことも明らかになった。これは意味①の「顔」と同じであるが、意味③の「を」の後ろに出てきた64個の動詞の中に、42個は例(10)の「する」であり、全数の66%程度を占めている。つまり、「～顔をする」という慣用表現は「顔」を構成要素に持つ慣用表現における比較的によく使われている表現であることが分かる。そのほか、後接要素の第2位は格助詞「で」であり、今回の調査に出た「で」はすべて例(12)のような動作の様態を表す「で」である。

上述のように、意味③として使われる「顔」は、よく人の表情や気持ちを修飾する表現と共起する。また、意味①と意味②の「顔」と違い、意味③の「顔」は様態補助表現「そうだ」「ようだ」とも共起しやすい。

- (9) フランクは申し訳なさそうな顔になってうつむく。  
 (10) 私も精一杯明るい顔をしてみせる。  
 (11) 将軍の激怒した顔に圧倒されて、検問の少尉はすくみ上がった。  
 (12) 赤ちゃんを抱っこしたお母さんはほっとした顔で、椅子から降りてきた。

### 3.2.3 多義語「顔」の抽象的なものを指す拡張意について

本研究は、意味④、意味⑤と意味⑥を「顔」の抽象的なものを指す拡張意に分類した。意味④と共起しやすい要素を表6に、意味⑤と共起しやすい要素を表7に示す。今回の調査で、意味④と意味⑤の例文数が100未満であるため、上位3位だけを表に示した。また、意味⑥で使われている「顔」の例文が2文のみであったため、意味⑥の部分は例文だけをここには示した。

表6 共起しやすい要素

前接文脈		後接文脈	
要素	数値	要素	数値
なし	8	を	17
と	5	見知り <sup>6)</sup>	5
で	4	が	1

表6から、意味④で使われる「顔」は前に形容詞や副詞などのような修飾言葉が来ないことが分かる。意味④の「顔」の前に何も来ない8つの例文を詳しく見ると、7つの例文は「顔」の後ろに例(13)のように「～を合わせる」が使われ、残り1例は例(14)の複合語「顔見知り」であることが明らかになった。また、第2位の「と」の例文をみると、「と」の前に出現したのは例(14)のような人称代名詞であることも分かった。これは、意味⑥の「顔」は「交際」「対面」「関係」の意であり、すべて他人と協力して行う行為だと深く関係があると思われる。第3位の「で」は、例(13)のよう

な交際や対面が起きた場所を表す「で」である。

他の意味と比べ、意味④の「顔」の後接要素は比較的単純であることも分かる。表6に示されているように、意味④の後接要素は3つだけである。上位の「を」の後ろに来る動詞も「合わせる」、「知られる」と「付き合わせる」の3つである。その中、「合わせる」は15個であり、動詞全数の74%を占めている。「顔を合わせる」も「顔」を構成要素に持つ慣用表現において、出現頻度が高い表現の1つである。

上述のように、意味④の「顔」は修飾表現と共起しにくい、頻繁に慣用表現か複合語の形で現れる。

- (13) そんな状態の中、毎日のように病院で顔を合わせる主治医は私にとって頼もしい存在だった。
- (14) 英明と顔見知りだった人間は多いだろうが、数は有限だ。

表7 共起しやすい要素

前接文脈		後接文脈	
要素	数値	要素	数値
の	29	を	41
なし	14	が	17
が/に	6	は	3

表7に示されているように、意味⑤の「顔」の前接要素の上位は、意味①の「顔」とほぼ同じである。しかし、具体的な例文を見ると、意味⑤の「顔」は直前に「人称代名詞+の」が来る場合、例文(15)のように後ろに動詞「見る」や「見える」と共起しやすいことが分かる。この状況で使われる「顔」は省略されても、文の成り立ちに影響がない。この点は、意味①の「顔」と大きく違っている。また、前接要素の第2位は「なし」であり、これは「顔」が文の冒頭部に来ることではなく、「顔」の前に、直接「顔」にかかわる要素がないということである。この場合、「顔」の前に例文(16)のような頻度を表す副詞の出現頻度が高い。意味⑤の「顔」と共起しやすい後接要素に関しては、格助詞「を」の数は全数の半分以上を超えている。格助詞「を」の後ろに来る動詞の中、例文(16)の「出す」が最も数が多く、例文(15)の「見る」が「出す」に次ぎ、第2位である。「顔を出す」も出現頻度が比較的に高い「顔」の慣用表現の1つであると言える。

- (15) 子供の顔をもう5日見ていない。
- (16) 頻繁に顔を出すことで地域関係者とより一層の接触を図る。

最後に、今回の調査で意味⑥で使われた「顔」は例文(17)と(18)の2例だけである。全意味分類の中に使用数が最も少ない意味である。この2例の出所は両方とも政府の白書である。意味⑥の「顔」は意味①と意味⑤の「顔」と同じで「～の」と共起しやすいが、「の」の前に来た名詞は人称代名詞ではなく、国や地区のような組織を表す名詞である。

- (17) 大臣官房参事官(原子力立地担当)を置き、立地地域から見て国の顔の見える活動を強化している。
- (18) 土地区画整理事業施行地区の核となる公共施設、公益施設等を「地区の顔」として位置づけ、良好な景観形成及び地域のコミュニティ形成に配慮した。

#### 4. 多義語「顔」の中国語における扱い方

##### 4.1 分析資料と分析方法

###### 4.1.1 分析資料

本研究においては、多義語「顔」の中国語における扱い方の分析資料として、以下のようなデータ

を使用している。以下の小説には、人物の表情や容貌、心理活動などに関する描写が多いため、今回の分析資料にしたのである。

- I 『容疑者 X の献身』（東野圭吾、2005、文芸春秋）  
『容疑者 X の献身』（刘子倩译、2010、南海出版公司）
- II 『告别薇安』（安妮宝贝、2000、中国社会科学出版社）  
『さよなら、ピピアン』（泉京鹿訳、2007、株式会社小学館）

#### 4.1.2 分析方法

本稿は、多義語「顔」を考察の対象としている。上述の小説から、多義語「顔」が使用されている例文を抽出し、表1の基準で意味分類をする。さらに、抽出された各意味の「顔」の例文は、対訳版においてどのような表現が現れているか、どのように使われているかについて分析することにより、中国語における多義語「顔」の扱い方を明らかにする。

### 4.2 データの分析

#### 4.2.1 各意味「顔」の出現数

表8は、考察対象とした2冊の小説における「顔」の出現数をまとめたものである。全部で426の例文が確認できた。

表8 各意味の出現数

	①	②	③	④	⑤	⑥
『容疑者 X の献身』	126 (49.2%)	11 (4.3%)	95 (37.1%)	5 (2.0%)	19 (7.4%)	0 (0%)
『さよなら、ピピアン』	108 (63.5%)	14 (8.2%)	33 (19.5%)	5 (2.9%)	10 (5.9%)	0 (0%)
合計	234 (54.9%)	25 (5.9%)	128 (30.1%)	10 (2.3%)	29 (6.8%)	0 (0%)

表8から、小説においても意味①と意味③の「顔」が最も多く使用されることが分かる。また、コーパス調査で最も使用例が少ない意味⑥の「顔」は、今回の小説調査に出てきていないことも明らかになった。つまり、意味⑥の「顔」は一般的な文脈より特定所（政府の白書など）に出現しやすいと言えるだろう。

#### 4.2.2 多義語「顔」の中国語における扱い方

表9は、同じ文脈において、日本語の多義語「顔」に対応する中国語の扱い方をまとめたものである。

表9 多義語「顔」に対応する中国語の扱い方

「脸」系	省略	「面」系	表情	头	眉	长相	その他
220	62	29	23	23	11	8	50

表9に示されているように、多義語「顔」は主に中国語の「脸」系や「面」系に翻訳されているか、省略されている。「脸」系、「面」系というのは例文(19)と(20)のような「脸」か「面」という語彙素が入っている全ての詞である。この調査で、意味⑤以外に抽出された各意味の「顔」という詞が現れる文には「脸」系に翻訳されたものがある。特に、基本義意味①の「顔」の70%以上は中国語の「脸」に翻訳されている。中国語の中には日本の「顔」と同じく「颜」と書く漢字もあるが、日本の「顔」と対応できるのは「脸」であることが分かる。また、例(21)のように、中国語になると、多義語「顔」に対応できるマーカーがなくなった例文、つまり「顔」部分の翻訳が省略された例文も



少なくない。表9に示されている62例の中に53例が意味①と意味③の「顔」に属している。このような場合は、「顔」の直前か直後に出る要素しか訳文に残されていない。さらには、中国語の「表情」と訳されている「顔」も23例ある。この23例は全て意味③の「顔」である。意味③の「顔」は元々本研究の基準により、基本義からの具体的なものを指す拡張義の「表情」に分類されている。そのため、この意味③の「顔」に関しては、一部分は「笑顔」のような「脸」系に翻訳されており、一部分は直接「表情」か「眉」に訳されているのであろう。この点から、日本語の多義語「顔」に対応できる中国語は「脸」であるが、「脸」の使用範囲は「顔」ほど広くないとも言える。最後、3.2.1に述べているように意味①の「顔」に、「顔を上げる」という慣用語の出現頻度が高い。今回の小説調査で、意味①の「顔」の中に、「顔を上げる」例文が31例あり、各慣用語において出現頻度が高い慣用語である。この31例の「顔」は17例「脸」に翻訳され、14例「头」に訳されている。他に「头」に訳された「顔」は「顔を出す」と「顔を見せる」の中の「顔」である。

(19) ここではじめて靖子の顔に動揺の色が浮かんだ。

靖子的脸上这时才浮现动摇的神色。 (『容疑者Xの献身』)

(20) 彼の顔を、雨がぼんやりと曖昧にしてゆく。

雨水模糊了他的面容。 (『さよなら、ビビアン』)

(21) すると石神は無表情な顔を靖子に向けてきた。

石神听了立刻毫无表情地转向靖子。 (『容疑者Xの献身』)

## 5. 終わりに

以上のように、本稿はコーパスと小説を使い、計量言語学の視点から、多義語「顔」について考察してきた。多義語「顔」は基本義から様々な意味に拡張しているが、最も多く使われているのが基本義であることが明らかになった。また、各意味の「顔」と共起しやすい要素や文における使用特徴が違っていることも今回の調査でうかがえた。日本語教育現場で多義語「顔」について指導する際、このような特徴を反映できる例文を提示すべきだと思われる。さらに、日本語の多義語「顔」と最も意味が近い中国語は「脸」であるが、2つの詞は一対一対応している関係ではなく、中国語の「脸」より日本語の「顔」の使用範囲が広いことも分かった。つまり、完全に日本語の「顔」に対応できる中国語はないことも今回の調査で証明された。

最後に、今回の調査で1つ興味深い現象があった。「顔」を構成要素にした意味①に分類されている「顔をあげる」という慣用語は、中国語の「脸」と「头」に半分ずつほどの割合で翻訳されている。形も日本語における意味も同じであるが、なぜこのような現象が起きたのか、今回収集した例文の数が足りないため、分析できなかったが、これを今後の課題にしたい。

## 注

- 1) 「BCCWJ」は、国立国語研究所のKOTONOHA計画の中に位置づけられた1億語規模のコーパスであり、日本語で初めて、言語分析のために収集され、デザインされたコーパスとしての要件を備えたものである。(庵 2012)
- 2) 「顔」の直前に、直接「顔」に関わる要素がないことを指す。
- 3) 本論文に使った出典を示していない用例は、全てコーパスから抽出したものである。
- 4) イ形容詞とナ形容詞両方とも形容詞と扱う。
- 5) 動詞をアスペクトの観点から分類すると、4つの種類に分かれる。その第4番目のものを「第4種類動詞」といい、「形状動詞」ともいう。

6) 複合語「顔見知り」のことである。

#### 参考文献

- 有蘭智美 (2008) 「顔」の意味拡張に対する認知考察『言語と文化』  
田中聡子、ゲキゼ・タチアナ (2005) 「顔」概念の日露対照研究『世界の日本語教育』  
呉宏 (2009) 「日语“顔”类惯用語的认知语义分析」『解放军外国语学院学报』  
田昊 (2015) 「中国語における「けど」類で終わる「言いさし」の扱い方」『一橋大学国際教育センター紀要』  
『新明解国語辞典』(第7版)(2011)  
『明鏡国語辞典』(携帯版)(2003)  
『学研国語大辞典』(第2版)(1988)

## An Analysis of Polysemant Word “Kao”

LIN, Xiao

This paper focuses mainly on the usage of polysemant word “kao”. In order to study the basic meaning and extended meaning of “kao”, this paper specializes in analyzing it from the perspective of econometric linguistics. This paper also picked out sentences in which “kao” is used from bilingual novels and examined how “kao” is used in Chinese are extracted. “kao” has been expanded from primary meaning to various meanings, but the most commonly used meaning is primary meaning. It is also clear from this survey that there are no Chinese words which can easily correspond to Japanese polysemous word “kao”.